

## 「施設での看取り」

聖ヶ丘サテライトクリニック 院長 岡本 拓也



国は、医者が患者の住まいにまで出かけて行って診察し医療行為や処方を行う「在宅医療」をもっと増やしていこうとしています。もっと言えば、「在宅での看取り」を、国は今まで以上に増やしていこうとしています。

しかしながら、誰もが最後まで「自宅」で過ごせるかと言うと、現実問題としてそれはなかなか難しいと言わざるを得ません。自分の家で最後まで過ごすことが難しい理由はいくつかありますが、まず挙げなければならないのは「介護力」の問題でしょう。平たく言えば、家族に負担がかかり過ぎてしまう、という問題です。

確かに、食事や入浴や着替えなどといった日常生活の行動が一人では十分にうまく行えなくなった家族の世話を他の家族が長期間にわたって行い続けるのは、今の核家族世代にあっては尚のこと、非常にハードルが高いと言わざるを得ません。さらに、老老介護という厳しい現実、自宅で最後まで暮らすことを困難にいたします。介護にあたる家族が一人だけしかないような場合、最悪、世話をしている方の家族も具合が悪くなり、いわゆる「共倒れ」になってしまう可能性もあります。実際、私が訪問診療で関わっていたご家族

でもそのようなケースがありました。娘さんが自宅で病気のお母さんを一人でごんばって世話していたのですが、娘さん自身も倒れてしまって、親子で同じ病院に入院することになったというケースを今年の春に経験しました。

さて、以前にも書きましたように、厚生労働省が「在宅」と言う場合の「宅」には、「自宅」だけではなく、いわゆる老人ホームなどの「居宅系施設」も含まれます。「自宅で最後まで」というのは多くの人にとっての理想かもしれませんが、患者さん自身やご家族がそれを希望されるのであれば、どうかしてそれを叶えてあげられるようにお手伝いいたしますが、場合によっては居宅系施設を上手に利用するのも悪くはない選択肢です。施設によっては、住み慣れた自宅以上に安心で快適、というようなところもないわけではありません。

自分らしい生活を温かい心で支援してくれる施設。スタッフが輝いた笑顔で生き活きと働いている施設。入居者の表情がいい施設。家族が訪れやすい施設。最後(看取り)まで面倒を見ることを約束してくれる施設。そんな施設であれば、満足できる人生最期の日々を過ごすことができる可能性はグッと高まるでしょう。